

論文審査の結果の要旨

氏名：伊 佐 野 龍 司

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：多元的概念枠組みに基づく体育授業研究に向けた理論的・実践的研究-球技領域を手がかりとして-

審査委員：(主 査) 教授 鈴 木 理

(副 査) 教授 青 山 清 英

上越教育大学教授 土 田 了 輔

本論文は、球技を手がかりに、体育授業研究に多元的な概念枠組みを用いることの意義を理論的に抽出し、当の枠組みの有用性を検証した研究である。

著者は、体育授業研究の理論的基盤と球技の指導研究に検討を加え、授業の当事者らの社会的相互作用によって構成される意味（現実性）の解釈と共に、従来の研究では等閑視されてきた感覚的経験を媒介する身体（臨場性）までも捉える必要性を訴え、体育授業研究に多元的な概念枠組みの導入を試みている。

この目的を達成するために、第1章において、行動科学に基づく個人主義・技術主義的学習が展開される現状と、球技が有する「関係づくり」を基調とする学びが相容れないことを指摘し、当事者らの関係から生成される意味を捉える枠組みの必要性を論じている。第2・3章においては、体育授業研究の歴史的動向と球技指導の先行研究を網羅的に検討し、自然科学的認識枠組みがメインストリームとなった経緯と共に、社会構成主義に立脚した研究の思潮が勃興している系譜を整理する一方で、言語を媒介にした枠組みでは「身体で感じ取る領域」について言及が困難であることを指摘している。この身体の領域を取り上げるために、第4章では、多元性を支える現象学的人間学の基本概念及び身体知の分析能力の査定に関する議論を展開している。第5章においては、「多元的概念枠組みに基づく体育授業研究」の体育授業への実装可能性を検証している。第6章は、主要な研究知見及び独自性をまとめると共に、今後の体育授業研究の展望を論じている。

本論文が有する研究上の意義は次の通りである。第一に、体育授業に立ち現れる複雑な文脈情況に即して学問的に異なる概念枠組みを選択的に適用する研究方法論を提示した点である。この多元的概念枠組みの必要性を論じるにあたり、体育授業研究の理論的基盤、わけても球技・ボール運動系領域の指導に関する研究について、入念な論文検証（第2章・第3章）を展開している。授業研究の方法をめぐるこれまでの議論では、従前の方法の限界を指摘し、その解消を目指すという論法が常であったが、本論文はこうした二項対立に閉塞することなく、あくまで体育授業における児童生徒の成長を多角的・複眼的に捉えるために相互補完的な方法を用意することに注力している。こうして、本論文は、体育授業中に生起する出来事について、行動科学的には客観的指標に基づいて適否が判別されるような場面であっても、児童・生徒の関係性や身体のありようを多元的に捉える枠組みを設えることによって、そこで得られた学びに多義的な意味・価値を付与する道を拓いている。

第二に、従前の研究では未着手であった「身体で感じ取る領域（臨場性）」の存在を研究対象に位置付けた点である。近年、学校体育における球技指導の中心課題は、技能の習得・習熟からゲーム中の戦術的理解・判断・実行へとシフトしてきた。このことは、授業を「当事者が言語を介して意味を生成する社会的過程」と捉える発想を惹起したが、その基底となる身体については未着手のままであった。本論文では、言語を介した学び、すなわち能動的な意識の働きと共に、その基底に位置づく受動的な意識の働きまでを捉える現象学的人間学の枠組みを導入し、関係づくりを基調とする球技の学びを能動性／受動性の重層的な視座から捉えることを可能にしている（第4章・第5章）。これは、球技指導において課題とされていた技術主義・個人主義の学習からの脱却に大きく貢献する。さらに、現象学的人間学の視座に立脚する上で欠かせない体育教師自身の運動感覚意識の分析・精緻化を査定する方法を考案（第4章）することで、本研究知見の現場への実装可能性を一層高めることにも注力している。なお、この査定方法を呈示した基礎論文は、学会論文賞を受賞し、社会的にも評価を受けている。

第三に体育科教育学の発展に対する意義である。多元性を支える「身体で感じ取る領域」をも視角に収めることで、教師教育や授業研究の方向性も拡大することとなった。前者においては、教師の立ち位置が、授業の外側から「観察・分析される者」としての「研究対象者」から、授業の内側の「いま・ここ」を預かる「当事者」へと変更される。また、後者においては、これまで言語による相互作用が殆ど介在しないことでいわば「お手上げ」になっていた体育授業についても、現場に醸成される濃密な意味を汲み出すことが可能となり実際、学校生活上の様々な困難を抱えた生徒が多く在籍する学校の体育授業の現実性／臨場性を捉えることに成功している。この成果は、今後の体育授業を対象とする研究デザインの抜本的な見直しを迫る重要な知見である。

以上のとおり、本論文は、入念な理論の検証と体育授業に実装した成果に基づき、体育科教育学における授業研究ならびに教師教育に対してきわめて大きな貢献を果たすものである。

よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令和 5 年 1 月 7 日